The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	集団語研究
Author(s)	米川, 明彦
Citation	語文. 2001, 75-76, p. 107-115
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68982
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

集団語研究

米川明彦

一　集団語とは何か

一・一　先行の研究

「集団語」とは何かを述べる前に、先行の研究を略述しておこう。「集団語」という用語は柴田武（一九五六）が初めて使った。そこで言う「集団語」は主として隠語・職業語・スラングを指し、次のように述べている。

この三つを通じて、集団で人工的に作られるという点は共通であるから、これをひとまとめに集団語と呼ぶことにする。

また柴田（一九五八）は集団語の性質について次のように述べている。

・集団語は、きわめて人工的に作られます。
・集団語は集団内のメンバーの結びつきを固くします。
・集団語の特徴は、単語の形が変わっているか、単語の形は同じでも意味がずれているか、そのどちらかです。
・集団語を目的によって分類すると、次の三つになります。第一は隠語、第二は職業語または専門語、第三はスラング。

柴田の「集団語」を受け継いだのが渡辺友左（一九七七）（一九八一）である。渡辺（一九七七）は「集団語」とはどういうものか大まかに述べている。

集団語のことについて若干触れておく。狭義の社会階層（・近代階層）は、操作的なものであって、社会集団とは別のものだ。社会学では、この二つをはっきりと区別している。この社会集団が使用している、その集団に特有な、ないしは特徴的なことばは、集団語と呼ばれている。

泥棒・スリ・ヤクザ・暴力団のような反社会的集団から、政党・組合・企業・団体・学会・官庁・学校、はては左翼の超過激派集団まで、社会集団にはさまざまのものがある。だから、集団語にもさまざまのものがある。細かくみていけば、おそらく現代日本語には、社会集団の数ほど異なる集団語があるということになるだろう。

しかし、これら多くの集団語は、その成立の契機の性格からいって、大まかではあるが、次のように分類することができる。

A　隠　語
B　非隠語 { a　術語・専門語・職業語など
　　b　スラング

また渡辺（一九八一）は隠語を中心に「集団語」を述べ、「集団語」を次のように定義している。

集団語とは、民族語と国語、それにその方言の内部にあって、特定の社会集団、それに職業・スポーツ・学問・政治・芸術などさまざまな社会の専門分野が使用する、その社会集団や社会の専門分野に特有なことばのことである。ないしは、特有までとはいえないにしても、特徴的なことばのことである。

「集団語」を成立の契機から、先と同様の分類をしている。

一・二　筆者の研究

このような流れの中で、米川明彦（二〇〇〇a）（二〇〇〇b）は渡辺の定義を取り入れ、「集団語」を次のように定義した。

「集団語」とは特定の社会集団・専門分野に特有な、あるいは特徴的なことばのことで、反社会的集団の語（スリや泥棒の語など）・職業的集団の語（業界用語・職場語）・趣味娯楽集団の語（囲碁・将棋・釣りなどの語）・若者集団の語（若者語・キャンパス用語）などを指す。

しかし、集団語の分類は渡辺と異なり、集団の種類に基づいて次のように分類した。

- 集団語
  - 反社会的集団の語
  - 職業的集団の語
  - 趣味娯楽集団の語
  - 若者集団の語

そして各集団ごとに隠語と非隠語があるという点で渡辺と異なる。すなわち、集団語の分類の第一基準は隠語かどうか（隠すためかどうか）ということではなく、どういう「社会集団」かによる。そこで「社会集団」の捉え方が問題になるので、「社会集団」について概念を明らかにしておきたい。

二　社会集団とは

社会集団は次の五つの条件を備えた集団のことである（森岡清美・塩原勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣、一九九三年参照）。

①継続的な相互作用（相互作用）
②共同の集団目標の設定と協働（集団目標）
③規範の制定による成員規制（集団規範）
④地位と役割の配分（組織）
⑤一体的な「われわれ感情」に基づく成員の連帯（集団意識）

しかし社会集団は右の条件を必ずしもすべて満たしているとは限らない。この条件を備えるほど集団の凝集力は高まるゆえ、その程度によって集団の特性が異なる。

右のような条件を考慮して社会を分類すると次のようになる（安藤喜久雄・児玉幹夫編著『社会学概論』学文社、一九九七年参照）。

- 全体社会
  - 社会的カテゴリー（統計学的集団）
  - 社会的集合（非組織的集団）
    - 直接的接触集団
    - 間接的接触集団
  - 社会的集合（組織的集団）
    - 基礎的社会集団
    - 機能的社会集団

「社会的カテゴリー」とは、たとえば団塊の世代・有権者など性・年齢など一定の社会的指標によって類別された集群で、「社会集団」

ではない。筆者が集団語に若者集団を取り入れているが、それはこの社会的カテゴリーとしての若者ではなく、多くは学校・キャンパスに連なる若者集団という意味で、後述する機能的社会集団のひとつである。

「社会的集合」とは、たとえば野球場の観客のような直接的接触集団の群衆や間接的接触集団の一般大衆などを指し、多数の匿名の人間から成り、組織的集団ではない。したがって、これも「社会集団」と区別する。

「社会的集団」とはある程度、地位と役割の体系化が見られる組織的集団を指す。それはさらに家族・民族のような血縁的集団と村落・都市のような地縁的集団とをひとまとめにした基礎的社会集団と、政治的集団・経済的集団・文化的集団などの機能的社会集団とに分けられる。筆者のいう「社会集団」はこの機能的社会集団を指す。

以上を前提として筆者が先に集団語を四つに分類した、その大分類について、右の条件から説明しておこう。

まず「反社会的集団」は暴力団をはじめ、暴走族・スリ・盗人などの犯罪者集団で、メンバーの数の多少に差はあるが、継続的な相互作用がある（条件①）。集団目標が反社会的（違法行為による営利目的など）に設定され、協働している（条件②）。掟が制定されており、それを破ると制裁が加えられる（条件③）。組織化の度合いが高く、地位と役割が配分されている（条件④）。特に暴力団や暴走族は集団意識が強い（条件⑤）。

次に「職業集団」は機能的社会集団で、職種によって継続的な相互作用に程度の差がある（条件①）。警察やテレビ業界はいつも継続的なやりとりがあるが、鍛冶屋間にそれがあるとは思われない。共同の集団目標が設定されている（条件②）。職種により集団規範の強いところと弱いところがある（条件③）。前者の例に警察・官庁、後者の例に芸能界がある。組織化の度合いが高いところと低いところがある（条件④）。前者の例に企業や官庁・病院業界・航空業界、後者の例に個人経営の店や会社がある。集団意識の強いところと弱いところがある（条件⑤）。前者の例に警察・国会、後者の例に芸能界がある。

「趣味娯楽集団」は団体・組織・催し物・機関誌などを通じて相互作用をある程度、継続的に行っている（条件①）。登山者は初めて会ってもウチの仲間意識を持ち、共通のことばを持っている。共同の集団目標（勝負に勝つ・制作するなど）を持っているが、協働性（条件②）はあまりない。規範の制定による規制（条件③）はあまりない。地位や役割の配分（条件④）はほとんどない。趣味娯楽を通じての一体的な感情がある（条件⑤）。

「若者集団」は学校・キャンパスで継続的な相互作用がある（条件①）。しかし共同の集団目標を設定する（条件②）ことはあまりない。その場そのときの「ノリ」を求めているに過ぎない。したがって集団規範（条件③）また組織化による地位役割配分（条件④）もないが、連帯意識はある（条件⑤）。

以上から、五つの条件は「反社会的集団」にすべて備わっており、「職業的集団」「趣味娯楽集団」「若者集団」の順に条件がそろわなくなる。

三　集団語研究の位置づけ

集団語研究は社会言語学の属性とことばを扱った一研究分野である。なぜなら、社会言語学は社会の中で生きる人間、ないしはその集団とのかかわりにおいて、言語現象・言語運用をとらえようとする学問であるからである。集団語はことばの使い手が属する集団の属性の違いがことばの変異となって現れてくるからである。

また集団語研究は国語学（日本語学）の語彙論の中で位相語の研究に当たる。位相語の中でも反社会的集団の隠語は比較的古くから研究されてきたが、各集団の語を総合的に研究することはまだなされていない。

右の事柄は従来から言われていることであるが、筆者はこれとは別の観点で集団語研究を位置づけている。それは俗語論の一研究分野である。筆者は米川明彦（一九九八）で、俗語論の展開を述べた。ここで簡単に繰り返しておこう。

まず「俗語」とは話しことばの中で公の場、改まった場では使えない（使いにくい）、語形・語源・意味・用法・使用者などの点が、俗っぽい・くだけた・下品・卑猥・荒っぽい・誤っているなどと意識される語や言い回しを指す。多くの場合、改まった場で使う同義語または同意の表現を持っている。主な俗語の候補語に若者語・業界用語・隠語・卑語・流行語・蔑視語の大部分あるいは一部分がある。また一般卑俗語がある。

集団語は右の業界用語・若者語・隠語を含むので、俗語の研究分野である。

右の定義について少し説明を加えておく。

第一に俗語は文章語ではなく、話しことばである。ただし、文書用の略記語を口頭でも使う語は俗語とする。たとえば旅行業界の「ウナ」（至急）「レラ」（連絡）「ヨロ」（よろしく）など。

第二に俗語は標準的、改まった感じのものではなく、俗っぽい（品位を欠くさま）、くだけた（標準的でない）、下品（その語を発言する者の品位を疑う程度に品位のないさま）、卑猥（性的なものに限ったことがら）、荒っぽい（乱暴な物言い）、誤っている（誤用・誤形）という言語意識を持つ語や言い回しである。たとえば、航空業界で使う「オペセン」は正式には「オペレーションセンター」と言う。

第三に若者語、その中でもキャンパス用語（キャンパスことば）はほとんどが俗語である。

第四に業界用語の内、専門語を除く集団語は俗語である。たとえばテレビ業界用語「カメリハ」（カメラリハーサル）「波代」（企業がＣＭのスポンサーとしてテレビ局に払う電波料）など。

第五に流行語の中でも軟派に属するものは俗語である。

第六に隠語は集団内の秘密保持の目的のために語を言い換えたり、意味を変えたりして使う語で俗語である。たとえばあるデパートの店員間でトイレに行くことを「遠方」、食事に行くことを「きざえもん」と言う。客に聞かれてはまずいためである。

第七に卑猥な、または下品なことを指す卑語は俗語である。

第八に蔑視語（差別語）は改まった場で使えないので俗語である。

第九に俗語は年齢・性別・職業に関係なくすべての人が使い得る語である。これを「一般卑俗語」と呼ぶ。

第一〇に俗語は当世風かどうかに関係がない。

第一一に俗語は世間一般に広く使われるかどうかという範囲とは

関係がない。ある職場にしか使われていない職場語のように、きわめて限られた集団のみに使われる語がある。

第一二に俗語は日常性とは関係がない。日常的な語もあれば非日常的な語もある。

第一三に俗語はだれがだれとの会話に使うかが問題になる。

第一四に俗語か否かの判断は個人的、主観的なものである。その人の言語意識による。

筆者はこのような俗語の中に集団語をとらえることを考える。

四　集団語研究のテーマ

まず各集団のことばの実態を明らかにすることが第一である。その基礎資料となるものに筆者の『集団語辞典』がある。本辞典は約一六〇の集団から七三〇〇語を取り上げ、八五〇〇の用例を四〇〇点の文献から掲げたものである。これを集団別にまとめ、分析する必要がある。具体例については後述する。

その際に何を課題にするかというと次の通りである。

①発生論

具体的な集団語がどのようにして生まれたのか、成立したのか、またどういうところから取り入れられたのかを明らかにする。

②造語論

各集団語がどのように造られるのかを研究する。各集団語の造語法を比較検討して、特徴を明らかにする。ここにはことば遊びや言い換えの問題も入ってくる。

③属性論

社会集団の違い（業種・目標・構成員・規範など）がどのような語彙の特徴になって現れているか明らかにする。

④言語意識論

a　評価…どんな語がどのように、またどの程度に評価されているかを明らかにする。

b　現状認識および志向…どういう場面でどんな集団語を使用するのか、してはいけないのかという現状認識を明らかにする。またこんな場面ではこう言ってほしいという志向についても明らかにする。

c　信念および規範意識…各集団で集団語はどうあるべきかという信念、何が正しいことばかという規範意識について明らかにする。

d　アイデンティティ…言語変種の選択に言語主体のアイデンティティを見ることができるので、それを明らかにする。

⑤カテゴリー論

どんなことを集団語にしているのかを明らかにする。またその中で同義語・類義語の問題やジェンダーから見た集団語も扱う。

⑥一般論

集団語一般の特徴を明らかにする。語彙的特徴・機能が主な課題である。また集団語から見た社会集団の特徴も明らかにする。

五　病院業界の集団語の特徴

以上のことをふまえて、次に具体的に病院業界の集団語の特徴を明らかにしたい。元看護婦小林光恵の『ナースをねらえ』（幻冬舎文庫、一九九九年）に「病院というところは、医療の性質上業界用語や隠語の多いところですから」とある。『集団語辞典』には病院業界

の集団語が二五八語掲載されている。

①語種

語種で一番多いのは外来語で（五三・五％）、また混種語の中でも外来語を含んだものが多い。これは医者が昔はドイツ語を、現代は英語を使っているためである。また彼らと職場をともにする看護婦もそれを使うからである。それは原語のかたちのままのものもあれば、省略したもの、動詞にする活用語尾「る」をつけたもの、アルファベットの頭文字化したものなどもある。次に例を挙げておく。かっこ内は意味である。

・ウエット（おもらし。英語 wet から）
・エクストラ（不整脈。英語 extra systole の略）
・エッセン（食事。ドイツ語 Essen から）
・エントラッセン（退院。ドイツ語 entlassen から）
・オーベン（研修医を指導する先輩格の医者。ドイツ語 oben から）
・アッペ（盲腸。英語 appendicitis の略）
・ウロ（泌尿器科。ドイツ語 Urologie の略）
・オペ（手術。英語 operation の略）
・アボる（流産する。ドイツ語 Abort から）
・アポる（脳卒中で死ぬ。ドイツ語 Apoplexie または英語 apoplexy から）
・ステる（死ぬ。ドイツ語 sterben から）
・ゼクる（死体を解剖する。ドイツ語 Sektion から）
・ＩＣＵ（集中治療室）
・ＨＢ（Ｂ型肝炎。hepatitis B の頭文字）
・Ｃ（癌。carcinoma の頭文字）
・ＣＡ（癌。同右）

これらの語は、医者は患者より「偉い」という一種誇りに満ちたもので、日本語で言えるのを、わざわざドイツ語や英語で言っている。またそれは患者には分からないので隠語にもなり、彼らの間の会話には都合がいい。「ステる」がそのいい例である。７１４編『看護婦の打ち明け話』（コスモ出版、一九九五年）に「病院には死がつきもの。死ぬことをドイツ語で『ステルベン』というので、業界では『夕べ、担当していた××さんがステった』という言い方をします。」とある。「死ぬ」はあまりにも縁起が悪いので、こう言っている。

ドイツ語と英語が使用される業界なので、これらの混用もある。胃の中に入れるチューブのことを「胃ゾンデ」または「マーゲンチューブ」と言う。「マーゲン」はドイツ語で胃、「チューブ」は英語。したがって「マーゲンチューブ」は独英混用語である。その他、ヒステリーを「Ｈｙ」（エッチワイ）とか「ハー・イプシロン」と言う。後者はドイツ語とギリシャ語を交ぜた読みである。

医学・治療などの専門用語の漢語が短縮されることも多い。仕事の効率をはかってのことである。

・入約（「入院予約」の短縮）
・尿測（「尿量測定」の短縮）
・放治（「放射線治療」の短縮）
・剖検（「解剖検査」の短縮）
・局注（「局部注射」の短縮）
・腰麻（「腰部麻酔」の短縮）

・生食（「生理食塩水」の短縮）

病院業界は医者や看護婦だけで通じる語を使い、患者はそっちのけにされているように感じる。このためこれらの集団語は彼らの結束を強める効果もある。

さらにこの集団は命に関わるため、堅い、難しいことばを使う傾向にあり、軽い日常語を避けている。その結果、漢語が増えている（二六・二％）。医者の米山公啓『医者がああ言えば患者がこう言う』（徳間文庫、一九九九年）に「日常用いられる言葉を避けるのが医学用語の原則である。漢字も音読み、訓読みと、日常の言葉を言い換える。耳鳴――『みみなり』は『じめい』、鼻声――『はなごえ』は『びせい』といった具合である。」とある。他には次のものがある。

・右側（うそく）・左側（さそく）
・酒精綿（しゅせいめん）（アルコールをしみこませた綿）
・鑷子（せっし）（ピンセット）
・氷枕（ひょうちん）

②カテゴリー

何についての集団語かという意味から見ると、当然、病名や症状に関する語が一番多い（約二〇％）。

・インバギ（腸重積。invagination の略）
・エデマる（浮腫がある。edema 浮腫から）
・コーマ（昏睡状態。ドイツ語 Koma）
・タキる（頻脈。tachycardia から）
・デハイド（脱水。dehydration の略）

ついで診察・治療・検査に関する語が多い。

・アナムネ（入院時に患者から症状や家族のことなどを聞くこと。ドイツ語 Anamnese から）
・静注（静脈注射）
・心カテ（心臓カテテール検査）
・心マ（心臓マッサージ）
・たたく（抗癌剤などで治療する）
・ツ反（ツベルクリン反応）

また医者・看護婦およびその仕事に関する語がある。

・ウンテン（部下の医者。ドイツ語 untern から）
・オーベン（前掲）
・オッフェン（医者が開業すること。ドイツ語 offen）
・器械出し（手術中に執刀医にメスやピンセットなどを渡す役）
・外回り（手術室における必要な器具を用意する看護婦の仕事）

患者およびそれに関連する語がある。

・オペ患（手術室に送る患者）
・クランケ（患者。ドイツ語 Kranke）
・スペ患（特別扱いの患者）
・担送（緊急時に担架で運び出さなければならない患者）

そのほか、病院にある備品・器具に関する語がある。

・エンゼルセット（死後処置に使う用具のセット）
・温度板（入院患者の体温表）
・ステト（聴診器。ドイツ語 Stethoskop の略）
・ドレッシング（手当て用の薬品・包帯類）

医学の専門家集団のため、一見専門用語のようだが、実際は別に正式な術語を持っており、その意味でこれらは俗語である。

③構成員別

病院業界と一口に言っても、医者もいれば看護婦もいる。また医療技師もいれば、薬剤師もいる。ここではおもに医者と看護婦の集団語を取り上げてきたが、両者の間でも使われる語に違いがある。看護婦だけが使う語には次のようなものがある。

・アッコちゃん（非番になると派手に着飾って出かける看護婦）
・あらさがし（注射をすること。血管と欠陥のあらをかけた洒落）
・入り（看護婦が深夜勤務につくこと）
・お伺いを立てる（看護婦が医者に指示を聞くこと。あるいは院内ポケベルを鳴らして医者を呼ぶこと）
・貫通式（女性が初めてセックスすること）
・護送（緊急時に車椅子で移動が可能な入院患者）
・ついてる（看護婦が患者の死に立ち会う）
・ノイる（ノイローゼになる）
・花マーク（文句ばかり言っているうるさい入院患者）
・秒死（心臓麻痺から転じて早漏）

看護婦だけが使う語ではないが、看護婦がよく使う語に「エッセン（食事）」「エントラッセン（退院）」「クランケ（患者）」「ステト（聴診器）」「ブルート（血液）」などがある。医者であり、推理小説の作家でもある志賀貢の『密室感染』（光文社、一九九四年）に「クランケは、ナースがよく使うドイツ語のひとつで、患者のことを指す。その他、エッセン（食事）、エントラッセン（退院）、ステト（聴診器）、ブルート（血液）などは、よくナースの口を衝いて出るドイツ語だ。」とある。

④語の新旧

また医者の語でも新旧がある。たとえば最近は「ドゥルック」（ドイツ語で血圧）と言わずに「血圧」と言う。米山公啓『医者語・ナース語』（徳間文庫、一九九三年）に「デゥルック（ドイツ語 Blutdruck）とも言っていたが、普通『血圧』と日本語でいうようになっている。テレビドラマでデゥルックなどとあまり使わない専門用語が出てくると、脚本を書いている作家の年齢がわかるというものである。」とある。その他、「エルブレ」（ドイツ語 Erbrechen の略で嘔吐）から「嘔吐」に変わってきている。米山公啓『医者語・ナース語』に「『エルブレ』などというとかえって古い医者やナースと思われる。ドイツ語の医学用語はまだ結構残っているが、使用頻度はかなり減っている。」とある。

さらにまた、ドイツ語から英語に変わるものもある。「異常なし」のことを「OB」（ドイツ語読みでオーベー）と健康診断の所見に書いていたが、最近は「n.p.」（英語読みでエヌピー）と書くことが多い。

⑤歴史的背景

最後に歴史的な背景について簡単に触れておこう。周知のように、明治時代以降、日本の医学はドイツに学んだため、病名や術語はドイツ語であった。作家の北杜夫は旧制松本高校（理乙）を卒業して東北大学医学部に進んだ医学博士である。一九四八年に大学に入学した彼は『どくとるマンボウ青春記　改版』（中公文庫、一九九〇年）にその当時のことを次のように記している。

さて、私が大学の始業式より一か月近くも遅れて仙台にやってきてみると、大学では（略）すでに講義はたいそうな進みようで、彼らの幾冊ものノートにはもう半分がた文字がぎっしりと埋っていた。おまけにノートの表紙には、解剖学とか生理学とか病

理学とかいう言葉が、ドイツ語やらラテン語で記してあるわけだが、その意味すらもわからない。ページを繰ってみると、講義にはむやみとドイツ語がまじっており、それがしばしば専門用語のため、読んでも半ばチンプンカンプンという始末である。本当をいえば、医者の使うドイツ語の単語は限られていて、二、三時間講義を聴けば慣れてしまうものだが、それでもはじめは更年期（クリマクテリウム）などと聞くと何事かと思うし、プレパリーレンはふつう「準備する」の意だが、医学界ではプレパラートを作ることだ。医者はカルテにさらさらとドイツ語を書いてみせるが、これは既成句を並べるだけのことで、べつだんドイツ語ができるというわけではない。用語にも古風な癖があり、「ときどき頭痛がする」と患者がいえば、Kopfwehzuweilen などと記す。つい「ときどき」はツヴァイレンと頭に浮び、ドイツ人との一般会話に使用するとなかなか通ぜず、ようやっとわかってくれても、「ずいぶんいかめしい言葉を使われますな」と相手はあきれた顔をする。かつて、明治からの日本の医学はほとんど大部分ドイツに学んだ。もともと教授からしてドイツ語教育で育ったため、私たちの時代は、病名、術語に英語を併記してくれる先生はごく少なかった。

こういうわけで、医者の語にはドイツ語が多く使われていたが、現在は英語で教育されているので、事情が変わり、先に見たように英語が取って代わりつつある。

以上、病院業界の集団語を分析してみた。このようなことを各集団に行い、それらを総合して研究することが第一の課題である。

参考文献

柴田武（一九五六）「集団生活が生むことば」『現代社会とことば』東京創元社

柴田武（一九五八）「集団語とは」『日本語の常識』宝文社

渡辺友左（一九七七）「階層と言語」『岩波講座　日本語　2』岩波書店

渡辺友左（一九八一）『隠語の世界』南雲堂

米川明彦（一九九八）『若者語を科学する』明治書院

米川明彦（二〇〇〇a）「集団語に見ることば遊び」『日本語学』第一九巻一号、明治書院

米川明彦（二〇〇〇b）『集団語辞典』東京堂出版

米川明彦（二〇〇〇c）「隠語による言い換え」『月刊　言語』一〇月号、大修館書店

米川明彦（二〇〇一a）「集団語に見る言い換え」『前田富祺先生退官記念論集日本語日本文学の研究』前田富祺先生御退官記念論文集刊行会

米川明彦（二〇〇一b）「集団語の造語法」『日本語学と言語学』明治書院

――梅花女子大学教授――